バングラデシュ農村におけるリプロダクションの変容と女性の健康

○松岡悦子（奈良女子大学　アジア・ジェンダー文化学研究センター協力研究員）

本発表は、バングラデシュの首都ダッカの南西約７０キロにあるマダリプル県の２つの村での調査をもとにしている。2016 年～2017 年にかけて、この２つの村のほぼすべてにあたる 512 世帯に質問紙調査を実施し、出産経験のある女性たちに過去の出産に関する経験を尋ねた。さらに、その中から 35 人の女性たちに、結婚、出産、産後についての聞き取り調査を行った。質問項目は、世帯員の年齢、結婚年齢、職業、学歴、月収、所有する家財や電気製品、マイクロクレジットへの参加の有無と借入金額や理由、出産場所、介助者、産後の儀礼、家族計画、産後の健康状態、1 日の時間利用など多岐にわたる。これらの調査については、現地の調査助手がベンガル語で戸別訪問と聞き取り調査を行った。

質問紙調査の結果、この地域では、18 歳未満で結婚した女性の割合が 78%と高く、この数値は現在も過去もそれほど変化をしていなかったが、夫と妻の年齢差は縮小する傾向にあった。さらに、この地域では妊娠・出産に関して大きな変化が 2005 年頃から生じていた。それ以前には、出産のほぼすべてが自宅で行われ、帝王切開はきわめてまれであったのに対し、2015-16 年には 40%が施設分娩に、介助者の 50%が医師になり、帝王切開率は 27%となっていた。これらのことから出産の医療化が急激に進んでいることが明らかとなった。この地域の医療状況としては、政府の病院が１か所あり、そのベッド数は 50 床で 2012 年以降その数に変化は見られないが、プライベートクリニックの数は、2012 年には４か所（31 床）であったのが、2015 年には９か所（72 床）と毎年のように増加していた。

さらに、出産の経験や満足度と出産場所や介助者とのクロス集計を行った。女性たちに、出産を「良かった」と思うか「悪かった」と思うかを尋ねたところ、自宅や親の家で出産した人は、出産を「よかった」とする割合が、出産を「悪かった」とする割合より有意に高かった。また、出産について「痛かった」と「痛くなかった」という答えを、出産介助者及び出産場所とクロスさせたところ、医師に介助された人は「痛かった」とする割合が、伝統的産婆や訓練を受けた介助者、助産師に介助された人よりも有意に高かった。また、場所との関係を見たところ、自宅や実家で出産した人は、病院やクリニックで出産した人と比べて、「痛くない」と答えた割合が有意に高かった。

さらに、出産経験と経済階層や学歴との関連を見たところ、クリニックで出産したことのある人は、自宅や親の家で出産した人と比較して月収が高く、学歴の点では有意に教育年数が長くなっていた。また、帝王切開を受けたことのある人とない人とを比較すると、帝王切開を受けたことのある人の教育年数や月収は、ない人より有意に高かった。また、出産経験を「良かった」と答えた人は、「悪かった」と答えた人よりも、母乳をやる日数が長くなっていた。

聞き取り調査の結果、若い女性たちは妊娠、出産、産後に夫の家族、および実家から支援を得ている人が多かった。従来のバングラデシュ農村の報告では、妻の出産に夫は無関心で、妻は妊娠中や産後早くから家事を普段通りに行うことを期待されると言われていたが、今回の調査では以下のような話が聞かれた。「夫が妊娠中の健診に付き添った」「産後３か月間実家に帰り、子どもの世話だけをしていた」「子供が夜に泣くと、夫が面倒を見て私を起こさずにいてくれた」「帝王切開で産後 6 か月間休んでいたが、夫がガスコンロを買ってきてくれたので調理が楽になった」また、女性たちは帝王切開に対して否定的な感想をもち、回復に時間がかかり、多大な出費になると答えていた。

以上のことから、バングラデシュ農村部において医療化された出産が急激に進んでいるが、女性たちの出産経験は必ずしも満足のいくものではなく、また長引く回復や痛みなどの点から、リプロダクティブ・ヘルスが改善されつつあるとは言えない。また、出産前後に夫婦の親密な関係が作られつつあることや、実家との結びつきの強さ、妊娠中や産後の休息期間の長さなどから、バングラデシュ農村の家族関係の変化が示唆される。

キーワード：リプロダクティブ・ヘルス　　バングラデシュ　　出産